

アルコール依存症者の回復・援助を行う 救世軍自省館



アルコール依存症者の支援を行う「救世軍自省館」。入所者に合わせたプログラムで、依存症からの回復を援助する

市民 パルターズ

このコーナーは、市内在住の市民編集委員が清瀬に関連する施設や事業者を巡って、清瀬のまちの特徴を紹介します。



市民編集委員

片寄明香さん
(野塩在住・主婦)

自分の意志ではコントロールできなくなり、強迫的に飲酒を繰り返す精神疾患「アルコール依存症」。以前は、「アルコール中毒」と言われていました。アルコールによって自らの体を壊してしまつたのはもちろん、さまざまな事件や事故・問題を引き起こす原因にもなっています。

今回は、「アルコール依存症者」に生活の場を提供し、回復援助を行う救護施設「救世軍自省館」(竹丘二丁目)の支援内容や取り組みをご紹介します。

伊吹正典施設長にお話を伺いました。

問合せ 救世軍自省館 ☎493・5374

「建物完成しましたが、事業開始までには時間がかかりました」と伊吹施設長。今では当然のように行われる近隣住民への事前説明が、当時は十分に行われず、

日本でのアルコール依存症者の回復支援の働きは、昭和44年、中央区月島の「救世軍自助館」の敷地内で始まります。当時は10人ほどが入所していたそうです。

昭和47年に社会福祉法人の認可を受け、昭和50年に専門的なアルコール依存症者施設の必要性を認め、東京都民生局から実績のある救世軍へ打診があり、回復支援の救護施設が開設されることになりました。



自由時間を過ごすホール。天井や壁の飾り付けは入所者の手作り

長期入所されている方もいますが、入所期間は平均で3年くらいです。依存症の治療法としては、飲酒すると不快な症状が出る「抗酒剤」や飲酒欲求を抑制する薬の服用があります。また、AA(アルコールリクス・アノニ

周辺地域との関わりについて伺うと、「自治会有志の方に地域連絡会に委員として年2回出席していただいています。また、清瀬市精神保健福祉担当者連絡会の一員としても活動しています」とのこと。その他にも、近隣大学や社会福祉を志す学生の実習や、市民・

「健康相談、生活相談などの個別支援とアルコールを飲まない環境を提供し、退所が可能となった時点で、本人や自省館、保護の実施機関の協議によって退所時期を決めます」と、伊吹施設長は話されます。利用者によって抱える問題は違うので、退所時期も慎重に決めなくてはならないようです。



入所者全員で食べる夕食。それぞれが提供されるメニュー

なかで十分な支援が提供できているのかと葛藤することもありますが、一人で部屋に閉じこもっていた方が、一緒に笑って過ごせるようになったときや、退所後に元気に地域生活を送っている姿を見かけた時はとてもうれしく、喜びを感じます」と、笑顔で話されました。

社会的変化により、受け入れる利用者の状態も変化しますが、「利用者にとってより良い支援を提供したい」との思いが、お話から伝わってきました。

「取材を終えて」
何かに依存することは誰にでも起こり得ます。自分でコントロールができなくなった場合、このような救護施設が必要になってきます。たくさん問題や苦労を乗り越えてこられた伊吹施設長は、「開設時の困難はありましたが、その後は住民の方との大きなトラブルもなく運営できました」と、おっしゃいます。



今回お話を伺った伊吹正典施設長

反対も多かった 清瀬でのスタート

キリスト教の一教派である救世軍の奉仕活動は、1865年、東ロンドンのスラム街で、貧しさのなかで苦しんでいた人々に、物心両面の援助をすることで始まりました。そのなかで、アルコール依存の人々への支援も行われ、この働きは現在まで、世界各地で続けられています。

日本では、明治28年から、災害救援活動・婦人保護事業・民間への医療事業などの活動が開始されました。

反発を招いてしまったそうです。何度も話し合いを持った結果、住民の方々の理解を得ることができ、昭和52年2月、東京都から救護施設としての事業開始認可を受け、2人の利用者を受け入れられた。



手すりや設置されている廊下。高齢化により、アルコール依存症以外の病氣も抱える入所者が増加している

救世軍自省館には、どのような方が入所されているのでしょうか。

「入所対象者は、地域生活が困難なアルコール依存症者で、合併する精神障害などがあっても、施設生活が可能な男性です」と伊吹施設長。定員は50人で、利用者数は常にほぼ満員だそうです。

「しかし、アルコール依存症以外にもその影響による認知症や精神疾患を合併している方、また高齢化により近隣の医療機関を受診する方も多くなり、活発に動けない方も増えているそうです。」

学生ボランティアの受け入れ、市民講座「依存症って何？」の開催(今年度は平成27年1月31日(土)の予定)などを行っているそうです。

アルコール問題に関する無料の電話相談、面接相談(酒害相談)も随時受け付けています。

また、施設内集会所の利用や、テント・リヤカー・バーベキューコンロなどの無料貸し出しもしているということです。

施設運営の基本のなかでの将来像について「アルコール依存症の総合専門施設として、対人援助のプロ集団を目指す」と掲げている救世軍自省館。支援員には、関係する福祉士の資格を取得するように、積極的に促しているそうです。

「現在、現場職員18人のうち15人が各種福祉士資格を有していますが、そこからがスタートラインです。経験を重ね、社会福祉の世界でどこでも通用するような知識や技術を身に付けてほしいと働きかけています。それが入所者支援にとって良い結果になると期待しているからです」と伊吹施設長。

また、これからは一時入所(シヨートステイ)も受け入れる予定だそうです。

特徴的施設ならではの 苦労と喜び

日々の苦労や喜びにはどのようなものがあるのでしょうか。

「入所されている多くの方は単身者で、認知症や高齢など、自力で生活ができない方がほとんどです。退所の受け入れ先の確保が困難で、苦労しています」と伊吹施設長。そのため、情報共有や職員を派遣するなどして、受け入れ先の開拓をしているそうです。

また、「限られた職員と時間のなかで十分な支援が提供できているのかと葛藤することもありますが、一人で部屋に閉じこもっていた方が、一緒に笑って過ごせるようになったときや、退所後に元気に地域生活を送っている姿を見かけた時はとてもうれしく、喜びを感じます」と、笑顔で話されました。

取材を終えて

何か依存することは誰にでも起こり得ます。自分でコントロールができなくなった場合、このような救護施設が必要になってきます。たくさん問題や苦労を乗り越えてこられた伊吹施設長は、「開設時の困難はありましたが、その後は住民の方との大きなトラブルもなく運営できました」と、おっしゃいます。